鬼の女～血の娘～

獅兎羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鬼の女～血の娘～

【Ｎコード】
Ｎ９８０７Ｚ

【作者名】
獅兎羅

【あらすじ】
鬼兵隊の鬼の女　芦咲（あしざき）　露呑（あらの）は真選組の隊士殺しを高杉から頼まれる。そこで懐かしい人たちに出会う。
「お前らは恨まないのか・・・。この世界を恨まないのか。」
別れ際に言った女性の一言に懐かしい人たちは昔の人の面影を感じ・・・・。

第一訓　掴みどころがない男

貴方に会えてよかった。
私がそう思ったのはいつのことだろーか・・・。

「ねぇ晋助。貴方はなにを考えているの？」
赤色の模様が入った着物を着た女性が言った。
しかし、その模様は血だった。
それも、全て自分の血ではない他の人からの返り血。
「さぁーな、俺にもそれはわからねぇーことだ。」
冷たい声で高杉は言った。
「貴方は本当に掴みどころのない男ですね。」
女性は笑顔で言った。
「それはオメーもだろ、霰呑(あらの)。」
高杉が言った。
「私はおんなよ。」
笑顔で言った。
その笑顔を見る高杉。

「そうだ、露呑。ひとつ頼んでいいか？」
「なんでもどうぞ。」
露呑は笑顔で言った。
「真選組の隊士何人かを殺してくれないか？」
高杉が言った。
「私、一人でですか？」
露呑が聞く。
「オメーなら簡単だろ？」
冷たい声で言った。
「えぇ。分かりました。」
露呑はそう言うと船から降りて行った。
「露呑・・・いや、春榎（しゅんか）お前は先生を奪ったこの世界を恨まないのか？」
高杉が言った。
かなしさを含んだ声で。

第一訓　掴みどころがない男（後書き）

露呑の本名は芦咲　露呑です。
春榎の正体はこれから分かりますよ。

感想お願いします

第二訓　隊士殺し（前書き）

残酷表現あります。
苦手な方はお控えください。

第二訓　隊士殺し

「邪魔するぜ。」

真選組の屯所にはなぜか銀時と神楽、新八が居た。

「で、依頼っつーのはなんだ？」

銀時が言った。

「それはな・・・『ドーン』・・・なんだ？」

土方の声を大きな音が遮った。

「副長、大変です。攘夷浪士が攻めてきました。」

「なに！？」

土方が声を上げた。

土方は刀をとり、外へ走り出した。

その後を万事屋組が追いかけた。

「あらら、真選組ともあろうに弱いのですね。」

土方たちが外へ出るとそこには一人の女性が居た。

女性の着物は血に染まり、頬にも返り血が付いている。

その女性の前には倒れている真選組の隊士が居た。

そして、近くには山崎が刀を構えている。

「山崎！！」

土方が叫んだときにはもう遅く、女性は刀を振り下ろした。

ドーン。

「ぐっ・・・。」

「だ、旦那・・・。」

女性の刀は銀時が止めていた。

「あらら、なかなかやるのね。白夜叉。」

女性が言った。

「お前なぜそれを？そのことを知ってんのは数すくねーぞ。」

銀時が驚いて行った。

「晋助から聞きました。」

女性が言った。

「お前・・・何もんだ？」

土方が言った。

「私は芦咲　露呑の申します。鬼兵隊の総統補佐ですわ。」

露呑が言った。

「総統補佐だと・・・？」

土方が言った。

「はい。晋助に一番近い幹部ですわ。」

そのことに驚きを隠せない土方。

「今回晋助からの真選組の隊士殺しをしろと言われたので参上いたしました。」

「隊士殺しだと！？」

土方が声を上げた。

露呑は笑うだけだった。

「お前俺と会ったことがあるか？」

銀時が言った。

「私は知りませんが、晋助は俺のなじみだと。」

露呑が言った。

「では、私はお暇させてもらいますわ。」

露呑はそう言い、去って行った。

私は嘘をついている・・・。

銀時。

貴方に会えて嬉しいのに・・・・。

嬉しくてたまらないのに。

私の・・・・初恋の人。

第二訓　隊士殺し（後書き）

どうでしたか？

感想お願いします。

第三訓　初恋の相手（前書き）

この話で・・・銀時がぶっ壊れます。
銀時ファンの方、見ない方がいいです。
ショックを受けます・・・。

第三訓　初恋の相手

「お前らそこに居ろ！！」

銀時はそう叫び、露呑のあとを追った。

露呑は塀に向いて肩を震わせていた。

「露呑だっけ？」

不意に声をかけられて、露呑が振り返る。

その目は赤かった。

「あら、来たのですか？白夜叉。」

露呑が言った。

「オメーこそ何やってる、こんなとこで泣いてよ。」

銀時が言った。

「泣いてなどいませんわよ。」

露呑が言った。

「強がりは昔から変わらねぇーな。」

銀時が言った。

その声に露呑は肩を落とした。

「はぁー、気づいてたの？」
「当たり前だろ？」
そんな二人の様子を電柱の影から土方、沖田、神楽、新八が見ている。
「あの二人知り合いぽいネ。」
「そうですねィ。」
「あんな美しい顔して人を斬るなんてな。」
４人はそんな会話をしている。
「お前、髪切ったんだな。」
「晋助が短いほうが似合うって。」
露呑は笑顔で言った。
「なぁ、春榎。」
「その名前で呼んでくれるんだ。」
さっきよりさらに笑顔で言った。
「なんで総統補佐なんかに？」
銀時が聞いた。
「不思議じゃないでしょ？戦時中だって鬼兵隊の副官だったから。」
「そうだけどよ・・・。」

銀時が少しか小さな声で言った。
「もしかして心配なの？」
露呑がからかうように言った。
「んなことない！！」
銀時が言った。
それを見てクスクス笑う。
「ヅラは元気にしてる？」
「あぁ。」
銀時が言った。
「そうなんだ。また会いたいな～。」
露呑が懐かしそうに言った。
「きっと会えるぞー。」
あっさり言う銀時。
「そうね。指名手配なのにあちらこちらに居そうだもん。」
露呑が言った。
「高杉も変わらないだろ。」

聞きなれた声がした。

「ヅラ！？」

銀時が驚いた声を出す。

沖田と土方が身構える。

「春榎も一緒か？」

「あら一瞬で分かった？」

露呑が聞く。

「当たり前だろ・・・。村塾のマドンナだったからな。」

「やめてよ。そんな言い方。」

露呑が笑う。

「じゃあ俺行くわ。」

ヅラはそう言い、去って行った。

「晋助も変わりないか・・・。」

露呑はそう呟き、クスッと笑った。

「昨日も散歩に言って怪我して帰ってきたんだよ。」

露呑が言った。

「あいつは本当に変わってないな。」

銀時が言った。

「変わったよ・・・。だって昔はあんなんじゃなかったじゃん。」

露呑が言った。

銀時も曇った顔を見せた。

「ねぇ、銀時。昔に戻れると思う？戦時中や村塾の時に・・・。」

露呑が聞いた。

「さぁーな。それは、高杉の考えによるだろ？」

「そうだね・・・。」

露呑が言った。

「銀ちゃんなんか幸せそうネ。」

神楽が言った。

「銀さんがあんな顔するの見たことないです。」

新八も言った。

「私、もう帰らなきゃ。晋助に怒られる。」

露呑がそう言った。

「春榎。お前は露呑として生きてくのか？」

「ううん。ヅラや晋助、銀時たちと二人きりの時は春榎に戻るよ。
その方が私もいいもん。」

露呑が言った。

「そうか。」

銀時が言った。
そして、何か悩んだ後言う。

「春榎・・・。顔貸して・・・？」
「いいよ。」

露呑が笑顔で言った。
その様子を電柱の影で声をひそめてみる。

「本当にか？」
「うん。」

すると、銀時は露呑の体を引き寄せて唇に唇を重ねた。
それに露呑は抵抗しないで身を預けた。
その様子をあぜんと見る新八たち。

「あれってキスですよねィ。」

沖田がぽかんと言う。

「あぁ・・・。」

土方も呆然としている。

「春榎・・・。会えてうれしいよ・・・。」
銀時が幸せそうな笑顔で言った。
「私も嬉しい！銀時・・・。」
露呑はそう言い、銀時に抱きついた。
銀時も抱きしめる。
「銀さんってあんなことできるんですね・・・。」
新八が呟いた。
「銀時・・・。ありがとう。」
「こちらこそ・・・。」
銀時はそう言い、露呑を放した。
そして、露呑は背を向け歩き出した。
その後すぐ振り返り一言告げた。
「ねぇ、銀時。お前らは恨まないのか・・・。この世界を恨まないのか。」
そう言い、去って行った。
「恨んでるよ、春榎。お前と高杉を裏の世界へ連れ込んだこの世界を・・・。先生を奪ったこの世界を・・・。」
銀時は静かな声で言った。

誰のも聞こえないほど小さな声で・・・。

「で、お前らはみるだけか？」

銀時に不意に言われ、新八たちは電柱の影から姿を現した。

「銀ちゃん。あの人斬り女。知り合いアルカ？」

神楽が聞いた。

「あいつは人斬りじゃねぇーよ。ま、斬っちゃったけど・・・。」

銀時が言った。

「どういう意味だ？つーか真選組の隊士を殺そうとしたんだよ。」

土方が怒りを含んだ声で言った。

「あいつは高杉の頼みなら何でも聞くって言いたいんですかィ？」

沖田が言った。

「半分正解。でも全部ってわけじゃねぇーよ。あいつにとっては晋助は兄貴的な存在だから逆らうときは逆らうさ。」

銀時が言った。

「あいつとはどんな関係だ？あんなラブラブして・・・。」

土方が聞く。

「初恋の相手だよ・・・。露呑は・・・。俺の初恋の相手なんだよ。」

「初恋・・・。ならなんであすこまでイチャつける？」

土方が聞く。

「両想いなんだよ、いまだにな。俺は今も好きだ・・・。露呑のことが・・・。」

銀時が言った。

「そうか・・・。だがあの女は鬼兵隊。しかもいいとこ身分だ。指名手配されんのは時間の問題だぞ。」

土方が言った。

「それはあいつも分かってるだろ・・・。それでも高杉のもとに居たいんだよ。それがあいつだよ。」

銀時が言った。

「じゃ、けーるぞ。新八、神楽。」

そして、そう言い家へと歩いて行った。

銀時は変わってない・・・。

私の大好きな銀時だ・・・。

今も恋の相手だ・・・。

ねぇ、晋助。

昔に戻れるかな？

第三訓　初恋の相手（後書き）

どうでしたか？

銀さんが・・・て自分で思いました・・・。

第四訓　散歩（前書き）

この話でも銀時が壊れます。

前話程でもありません。

第四訓　散歩

「露呑っていう娘。指名手配にするもな・・・。」

真選組屯所では幹部たちが会議を行っている。

そこへ・・・。

「すいませーん。」

女の声が聞こえた。

近藤たちが外へ出ると・・・。

女は刀を抜いた。

それにすぐ反応する土方と沖田。

「反応すんの早いな～。さすがってとこだね。」

女は笑顔で言った。

「お前・・・あんときの・・・。」

土方が呟いた。

「そうだよ。芦咲　露呑。鬼兵隊の総統補佐です。」

女の声に土方たちが顔を曇らせた。

「ま、今日は仕事じゃないから。」

露呑は白の袴に白の上、それに紺色の丈の長い上着を着ている。

「仕事じゃないってどういう意味だ。」
土方が首をかしげる。
「銀時に聞きたいことがあって。で、銀時の居場所を教えて欲しいんだ。」
露呑が笑顔で言った。
「それは無理だぞ。」
土方が言った。
その声で真選組が露呑を囲んだ。
「あっ、やっぱ無理かぁ。」
露呑はそう言い、塀に乗っかった。
「なんだ、そのジャンプ力・・・。」
土方が呟いた。
「攘夷戦争の時の愛称教えてあげる。私、破滅の副官って呼ばれてたんだから。晋助の右腕だよ、なめんなよ!」
露呑はそう告げ、走って行った。
「うーん。でも、どうしようかな?」

露呑はプラプラ歩いていると、目の前に「万事屋銀ちゃん」という店が・・・。

「可能性としてはあるよな・・・。」

露呑はそう呟き、階段を上って行った。

そして、チャイムを押す。

ピンポーン

「はーい。」

眼鏡の男の子、新八が出た。

「あの、銀時居る？」

「あ、居ますよ。」

新八は奥に行き、銀時を呼んできた。

「なんだよ、新八。って、春榎・・・。」

銀時が呟いた。

「春榎じゃない露呑だよ。」

露呑が笑顔で言った。

「なんで居んの？」

「なんでって用があるから来たの。」

露呑が言った。
銀時は露呑を中に連れ込んだ。
「銀ちゃん。この子、この間のラブラブしてた子アルカ？」
神楽が言った。
「そうだ・・けど・・・。」
銀時が少しアワアワしていた。
「クスクス。銀時かわいい。」
露呑が言った。
「な、なんだよ・・・。」
銀時が頬を赤くして答えた。
「で、あの・・・。露呑さんは・・・高杉さんの右腕なんですか？」
新八が聞いた。
「そうだよ。そう、今日は晋助についてなんだよ。」
露呑が言った。
「あいつがどうした？」
銀時が聞いた。

「また散歩。河上に探してきてって言われちゃった。」
「高杉、本当に散歩好きだな。」
銀時が呟いた。
「今度、怪我したら殴ってやる。後説教だな。」
露呑が言った。
銀時が苦笑いをしている。
そこで、またチャイムが鳴った。
「万事屋！！そこに芦咲　露呑居るか？」
土方が言った。
「居るけど・・・。」
土方たちはその答えを聞きドアを打ち破った。
「あーらーのー！！」
沖田が声を上げた。
「いきなりですか？」
露呑が呆れた声を出す。
「お前な・・・。またなんかやったのか？」

銀時が呆れ顔をしている。

「刀、持ち歩いてるだけだよ。」

「今、廃刀令だぞ。」

沖田が呟いた。

「きょう、スナック空いてるかな？」

近藤が言った。

「近藤さん、関係ないと思いますぜィ。」

沖田が言った。

「姉御は仕事あるって言ってたアルヨ。」

「つーか、今日、何日だ？」

銀時が言った。

「えっと・・・８月１０日です。」

新八が言った。

「あ～～～～！！！！」

露呑が大きな声を出した。

「露呑？」

銀時が聞く。

「今日、晋助の誕生日だ・・・・。」

露呑が言った。

「アイツ萩に居んのか・・・・。」

銀時も呟いた。

「私、行ってくる。」

露呑はそう言い、走って行った。

「おい、春榎じゃなくて露呑!!」

銀時が言った。

「あっ、銀時ありがとっ。好きだよー!!」

露呑は一瞬振り返って、告げて、走って行った。

「銀ちゃん?」

神楽が銀時の方を見ると、頬を赤く染めていた。

「銀さん、おーい!!」

新八が大きな声で言うとやっと普通に戻った。

「あ、おぉ・・・。」

銀時はあいまいな微笑みを見せた。

「で、あいつは・・・。」

土方が呟いた。

「高杉は・・・小さなころにある約束をしてんだよ・・・。大きくなったら誕生日に先生と酒を飲むという約束をな。」

銀時が呟いた。

そして、萩では・・・。

「晋助・・・。」

日が沈み始めている。

高杉は焼けている村塾の前に居た。

「・・・・春榎か。」

高杉が呟いた。

「酒飲んでるの・・・？」

露呑が聞く。

「あぁ・・・。約束したからな・・・・・、先生と・・・・。」

高杉が言った。

「そっか。」

露呑は一言そう言い隣に座った。

「あっ、鬼嫁・・・じゃん。」

露呑が呆然とした。

「いつもはな安物なんだけどよ、今年は２０回忌だからな・・・・。」

高杉が言った。

「そうだね・・・・。」

「お前も飲むか？」

高杉が聞いた。

「ううん。これは晋助と先生がやるべきだよ。」

露呑が言った。

「なぁ、春榎。」

「ん？」

「久しぶりにあすこいかねぇーか。」

高杉が言った。

「いいよ。」

露呑も答えた。

そして、日が沈みきった時・・・。

「きれいだね・・・。」

「あぁ・・・。」

二人は河川敷で星を見ている。

「昔もこうやってみたよね。」

「あぁ・・・。先生と・・・ヅラや銀時と・・・。」

高杉が言った。

「晋助・・・。今、ひとつ言う・・・。散歩言って怪我したら・・・殴るから。」

露呑が言った。

「なんで今言うんだ・・・。」

「別にいいじゃん。」

露呑が呟いた。

「お前は・・・銀時が好きか？」

高杉が聞いた。

「うん。好きだよ・・・・・。」

露呑が言った。

「でも、私は晋助のそばに居たい。辰馬とも・・・約束したし・・・・。」

露呑が付け足すように言った。

「そうかよ・・・・。」

「うん。」

銀時・・・・。

私はきっと銀時の横には居れない。

それが・・・私の運命だと思う。

でも・・・好きって言う気持ちは変わらない。

ねぇ、銀時。

私は晋助の右腕として・・・

頑張るよ・・・・。

晋助に恩を返すのが私のやること・・・・。

第四訓　散歩（後書き）

どうでしたか？

ここで露呑の紹介

芦咲　露呑・・・２５歳の１６０ｃｍ。

１月２日生まれ。

露呑は偽名で本名は芦咲　春榎。

仕事の時は敬語のお嬢様口調になる。

それ以外は男の子ぽくなる。

桂、銀時、晋助、辰馬と二人きりの時などは

春榎としている。

白の袴と白の上に丈の長い紺の上着を着ている。

攘夷戦争時代は高杉の上着なしに白の丈の長い上着

を着ていた。

感想お願いします。

第五訓　商談

「あら、仕事サボっいらっしゃるの？」

沖田が河川で昼寝をしていると、声が聞こえた。

沖田がアイマスクを外してみると・・・・。

「芦咲・・・露呑・・・。」

沖田が呟いた。

露呑は赤色の着物を着ていた。

「クスクス。一番隊の隊長さんってお昼寝がお好きなのね。」

露呑は笑いながら言った。

「お前は何をしてるんでィ？」

沖田が聞いた。

「サボりよ。」

露呑は笑顔で言った。

「サボっててていいんですかィ？」

「別にいいのですよ。それに、今は自由時間ですのよ。」

露呑が言った。

「自由時間？」
「えぇ、そうよ。」
露呑が言った。
そこへ・・・。
「姉様～！！」
黄色の髪の女～来島　また子がやって来た。
「あら、また子。」
「あぁ～。幕府の狗、お前姉様に何してんスか？」
また子が声を上げた。
そのまた子も桃色の着物を着ている。
「クスクス。また子、そんなんじゃないわよ。お話していたの。」
露呑が笑顔で言った。
「白夜叉に怒られちゃうッスよ。」
また子が言った。
「クス。そうね。じゃあね、一番隊のおさぼりさん。」
露呑がそう言い、去って行った。
「露呑ってよく分からない人ですねィ。」

沖田はそう呟いた。

そして、露呑とまた子は・・・。

「ここッスか？」

また子が言った。

「そうよ。」

二人がたどり着いたのはターミナルの船の場所。

「すいませーん。快援隊ってここにおりますか？」

露呑が言った。

「いますき。」

そう言ってやってきたのは笠をかぶった女の人だった。

「わしは陸奥じゃき。」

女の人はそう挨拶をした。

「私は芦咲　露呑といいます。こちらが来島　また子です。」

「こんにちはッス。」

また子が元気に挨拶をした。

「で、お求め物はなにがか？」
「こちらのものです。」
露呑はそう言い、メモを渡した。
「じゃぁ、今頭を呼んでくるき。」
陸奥はそう言い奥へと入って行った。
そして、奥から来たのは・・・。
モジャモジャ頭の男だった。
「なんじゃ。高杉のとこじゃなか。」
モジャモジャの男～坂本　辰馬が言った。
「クスクス。そうなのよ。で、辰馬。そのメモのやつよろしくお願いできるかしら。」
「別にかまわんきに。って、えっ？」
辰馬が間抜けな声を出した。
「おんし、なぜわしの名を知っちゅうがか？」
また子と露呑が顔を見合わせた。
「辰馬・・・。私のことお忘れ？」
露呑が言った。
辰馬はサングラスを押さえよく顔を見た。

「おんし・・・。春榎がか？」

辰馬が聞く。

露呑がコクっとうなずいた。

「今は芦咲　露呑って言うのよ。鬼兵隊の総統補佐ですの。」

「白夜叉とはラブラブッスよ。」

また子が言った。

「また子。余計な事言わないいのよ。」

露呑は頬を染めて言った。

「アハハハハハ。金時とは相変わらずがか。」

「辰馬もからかわないでくださいます。」

露呑が言った。

「で、何に使うがか？銃の弾なんか。」

辰馬が聞く。

「これは、また子のなのよ。拳銃使いですので・・・。」

「そうッス。」

また子が元気よく言った。

「ねぇ、また子。二人にしてくれます？」

露呑が言った。
「いいッスよ。」
また子はそう言い、部屋から出て行った。
「ねぇ、辰馬。これは事実じゃないんだけど・・・。今ねある噂が流れてるの。」
「噂がか？」
辰馬が聞いた。
「うん。晋助も知ってるんだけどね今日はそのことも言いに来たの。」
露呑が言った。
「一体何がか？」
「六鬼神を狙ってる攘夷志士が居るらしいの・・・。」
露呑が言ったら辰馬が顔を曇らせた。
「晋助がね・・・。辰馬に伝えておけって。」
「なぜわしに？」
辰馬が聞く。
「私と銀時それに、龍銀は名前がばれてないから辰馬やヅラには言った方がいいってことらしい・・・。」
「そうがか。」

辰馬が呟いた。

「私、もう行くね。辰馬・・・気をつけてよ・・・・。」

「分かったき。」

露呑は辰馬を背に歩いて行った。

辰馬・・・。

私は辰馬との約束護るよ・・・・。

そのために、私にできることをやる。

第五訓　商談（後書き）

どうでしたか？

辰馬と露呑の出会いでした～。

感想お願いします。

第六訓　心配事

「ただいま。」

露呑が鬼兵隊の船へ戻ってきた。

「お帰りでござる。」

河上が言った。

「晋助はどこ？」

露呑が聞く。

「晋助なら甲板でござろう。」

河上が言った。

「分かったよ。」

露呑はそう言い、甲板へと出て行った。

「晋助、今戻ったよ。」

「そうか・・・。」

いつも道理冷たい声が聞こえた。

「ヅラの方はどうだった？喧嘩してない？」

「ククク・・・。ヅラにはうまく言えた。運よくな銀時にも言えた

ぜ。」

高杉が言った。

「いいなー。銀時にも会えたんだ。こっちなんか辰馬私のこと忘れてたよ。」

露呑が呆れたように言った。

「ククク。あいつは相変わらずだな。」

「クスクス。そうだね。」

露呑が笑った。

その後、沈黙が続いた。

「ねぇ、晋助。」

「なんだ?」

高杉が聞き返す。

「なんで今頃六鬼神なんか・・・集めるのかな?」

「知らねーよ。」

高杉が無愛想に言った。

「龍銀、何を思って生きてるのかな?どこにいるのかな?」

露呑が静かな声で聞いた。

「俺も知らないよ・・・。」

高杉が呟いた。
また沈黙が続いた。
「俺らも中に入るか？」
「うん。」
露呑は頷き、高杉の後について行った。

一方、銀時と桂は・・・。
「高杉がなにを言うと思えば六鬼神をな・・・。」
居酒屋で桂が呟いた。
いつも道理変装をしている。
「その野郎何をやる気なんだ？」
「わけのわからない攘夷志士だ。俺らを集めて何になる。」
桂も銀時もいつもより真面目な顔をしている。
「龍銀、何をしてるかな？」
「さぁーな。俺のもそんなことぁ分かんねーよ。」
銀時がぶっきらぼうに言ったがどこか心配してるような声だった。
「じゃぁ、そろそろやめにしないか。もう酔ってきた。」
桂が言った。

「そうだな。」

銀時もそう言い二人は居酒屋を後にした。

別れ際、銀時が言う。

「オメーの事だから心配はしねーが気をつけろよ。」

「フン。貴様もな。」

桂が言って二人は別れた。

そして、かぶき町から離れた萩では・・・。

「六鬼神をねぇー。そんなことしてなにになんのか・・・・。」

一人の青年が呟いていた。

「ま、兄貴の事だから平気かな？平気じゃないか・・・・。」

青年の髪は綺麗な銀髪だった。

「かぶき町に行ってみるか・・・・。」

青年はそう呟き闇へと消えていった。

第六訓　心配事（後書き）

どうでしたか？

この物語では高杉率いる鬼兵隊は微妙なとこです。

大体は仲間・・・。

そして、活動報告にてアンケート実施中。

感想お願いします。

第七訓　喧嘩するほど仲がいい（前書き）

銀さんたちの子供時代です。

第七訓　喧嘩するほど仲がいい

『晋助〜！！お・き・ろ！！』

朝から晋助の部屋では春榎が声を上げる。

『なんだよ？春榎。』

『なんだよじゃないよ。早くしないとご飯なくなっちゃうよ。』

春榎が呆れたように言った。

『もぉ。分かった。』

晋助はやっと布団から起きだした。

『おはよう、晋助。』

朝から笑顔で松陽先生が言った。

『おはよう。』

銀時たちも笑顔で言った。

『おはよー。銀時、ヅラ、龍銀（りゅうぎ）。』

晋助もまだ眠そうだ。

『晋助はほんと！朝に弱い！！』

春榎が元気よく言った。

『それはオメーが強いだけだろ・・・・。』

晋助は眼を擦りながら言った。

『そうかもね。』

銀時が言った。

春榎も頬を膨らませて反抗した。

『なによ、銀時。私に対しての嫌味？』

『そんなんじゃねーよ！！』

銀時が言った。

『本当に？』

『本当だって。』

二人は口げんかになりそうになる。

それを、松陽先生が止めた。

『春榎、銀時。いい加減にしなさい。晋助、顔を洗っておいで。』

『はーい。』

子供たちが元気よく返事をした。

『じゃあ、ご飯にしますよ。』

『はーい！』

この日の朝ごはんはご飯と煮物。
煮物は先生の得意料理。
というか煮物しか得意じゃない。
一応、他のも作れるけど・・・。

『やっぱ先生のはおいしい。』

晋助が笑顔で言った。

ご飯を食べた後は塾である。
塾では松陽先生が遺伝子がどうのこうのと言っている。

その授業を真剣に聞いている小太郎。
先生ばかり見ている晋助。
居眠りしている銀時。
銀時につんつんしている龍銀。
銀時ばかり見ている春榎。

『今日の授業ちゃんと聞いていたか？』

授業が終わってから小太郎が銀時に聞いた。

『聞いてた、聞いてた。あの遺伝子がどうのこうのってのだろ？』

銀時が言った。

『嘘だよ。兄ちゃん寝てたもん。」

そこで、龍銀がチクった。

『はぁ、やっぱりか。」

小太郎が呆れ顔で言っている。

『先生の授業は子守唄かよ。』

晋助が呟いた。

『銀時にとってはなんでも子守唄だよ。』

春榎が呆れるように言った。

『なんだよ、みんなそろって。俺に嫌味とかあんのかよ！』

銀時が言った。

『別に！！』

春榎が言った。

また二人が口げんかになりそうになる。

『喧嘩すんなよ。』

小太郎が言った。

『ヅラは黙れ。』

春榎が言った。

『そうだ、ヅラにゃ関係ねぇーよ。』

『俺って一体何だ？』
小太郎が晋助に聞いた。
『ヅラをかぶってる人。』
晋助があっさり言った。
『俺のは地毛だ！』
小太郎が怒鳴り晋助に飛んだ。
ゴツン。
『いってぇー！！』
晋助が声を上げた。
『フン。さっきのは晋助が悪い！！』
『かんぺきにヅラが悪いだろ！！』
晋助が怒鳴った。
『晋助、兄ちゃん、ヅラも春榎も、やめなって！！』
龍銀が止めに入った。
それにより喧嘩は特大サイズになった。
『春榎のバカ！！』
『銀時の間抜け！！』

『晋助は人の気持ちを考えてないから痛い目にあうんだ！！』
『なんだよ。このヅラ！！』
『いい加減にしろよ、お前らぁ～！！』
喧嘩は夕方まで続いたとさ。

第七訓　喧嘩するほど仲がいい（後書き）

どうでしたか？

ちっちゃい頃の銀さんもヅラもかわいいですよね。

ヅラは優等生からなにがあったら妄想全開キャラになるんだろう・・・

感想お願いします

第八訓　仲直り

鬼兵隊の甲板で露呑と晋助が並んで座っていた。

「はぁ～。」

「5回目・・・。」

晋助が言った。

「数えてたの？」

「あぁ。5回分の幸せが逃げたぞ・・・。」

露呑が膨れて言った。

「そんなことないよ。私は幸せがいっぱいだよ。」

晋助が聞く。

「そうかよ・・・。で、なんでため息をついてんだ？」

晋助が呟いた。

「六鬼神のことについてね・・・。」

「そうか・・・。」

露呑が呟いた。

「私は・・・、何ができるのかな？」

「お前はお前にしかできねぇー事があるんじゃねぇーのか？」
晋助が言った。
「えっ？」
「お前は俺の支えでもあり、銀時の彼女でもあんだぜ。俺らをつなぎ止めんことができるのはお前しかいないんだよ。」
晋助が言った。
「晋助は銀時たちと仲直りしたいの？」
露呑が聞く。
「さぁーな。したいのかもな・・・、お前にそんなこと言うなんて。」
晋助が呟いた。
「クスクス。晋助は子供だね。」
「どういうことだよ？」
晋助は頬を膨らませた。
「そういうところが子供。」
露呑が笑いながら言った。
「お前だって膨らませるだろ？」

晋助が言った。

「そうだけど・・・。なんていうか・・・、晋助が子供に見える。女の母性本能ってやつかな？」

露呑が笑顔で言った。

「母性本能ねぇ・・・。」

晋助が呟いた。

「だから、私のもとから離れないでね。」

「ククク。銀時が泣くぞ。」

晋助が言った。

「恋愛感情じゃないよ。それに、晋助に恋愛感情は抱かない。」

露呑が言った。

「ひでぇーな。」

「そうかなぁ？」

露呑が笑顔で言った。

銀時、ヅラ。

もしかしたら、昔に戻れるかも・・・。

晋助の魂はまだそこにあるんだよ。

村塾に、攘夷戦争の時に・・・。

だから・・・。

私は、晋助をそばで支える。

また、みんなで笑えるように・・・。

第八訓　仲直り（後書き）

どうでしたか？

感想お願いします。

第九訓　会議（前書き）

この話でオリキャラ龍銀の詳しいことが分かりますよ。

第九訓　会議

「ふぁ〜。暇・・・。」

露呑が暇そうに歩いている。

「春榎。」

「ん？ってヅラ。」

露呑が言った。

「ヅラじゃない、桂だ。」

「いい加減あきらめたら？」

露呑が呆れたように言う。

「それは、どうでもいいんだ。晋助にひとつ伝言を頼む。」

桂が言った。

「伝言？」

露呑が不思議そうに首をかしげた。

「あぁ。明日、万事屋銀ちゃんで会議を開くってよ。」

「万事屋銀ちゃん？あぁ、銀時のとこね。でも、会議って？」

露呑が聞く。

「六鬼神のあの事が本当っぽいんだ。その会議だ。」

桂が言った。

「本当なんだ。分かった。言ってみるよ、どんな反応するか分かんないけど・・・。」

露呑が言った。

「あぁ、頼む。」

桂はそう言い去って行った。

「六鬼神だとぉ？」

真選組の真選組の屯所で土方が声を上げた。

「あっはい。最近攘夷浪士の動きが怪しかったんで調べたら六鬼神という名前が出てきたんです。」

山崎が説明する。

「トシ。あす、総悟と俺らで緊急会議を行う。」

「はい！！」

「銀さん。今日誰か来るんですか？」

次の日の朝。
新八が聞いた。
「あぁ。ヅラと辰馬、あとはその他もろもろ。」
銀時がだるそう言った。
「その他って誰ですか？」
「すぐわかんぞ。」
銀時が言った。
「邪魔するぞ。」
桂が入ってきた。
「桂さん。」
その後ろからは・・・。
「アハハハハ。邪魔するぜよ。」
「坂本さん。」
「なんでもっさんが居るアルカ？」
神楽が聞いた。
「いやー。わしも良く分からんぜよ。」
辰馬が笑顔で言った。

「あっ。辰馬たちもう来てたの？」

さらにその後ろから女の声が聞こえた。

「ククク。次会ったらぶった斬るんじゃなかったのかァ？銀時にヅラ。」

女の後ろからは冷たい声がした。

「高杉、春榎。」

銀時が呟いた。

「一時休戦だ。以上事態だからな。」

桂が言った。

「ククク。違いねぇ。」

高杉が呟いた。

「さぁーて。会議といきましょうか。」

露呑が笑顔で言った。

「あぁ。」

そして、真選組の屯所では・・・。

「会議するって言ったて六鬼神が誰か分からないんですぜィ？」

沖田が言った。

「まぁ、それはあるが・・・。」

土方が呟いた。

「攘夷時代活躍した人なので可能性としては旦那、高杉、桂。そして、坂本辰馬だと思いますが・・・。」

山崎が呟いた。

「俺が教えてやろーか？幕府の狗よぉ。」

窓側から冷たい声がした。

高杉よりも少し高い声で・・・。

真選組が振り返るとそこに居たのは・・・。

「高杉・・・？それとも旦那ですかィ？」

沖田が言った。

「残念どっちもハ・ズ・レ。」

声の主は楽しそうな声で言った。

声の主は銀髪の髪に薄い青の眼、髪はストレートでポニーテールにしている。

なにより、死んだ魚の眼・・・。

「まぁ、間違うのも当たり前だよねぇ。」

この青年はニコニコしながら言った。

「で、六鬼神について知りたいんでしょ？取引しない？」

青年はとても楽しそうに言った。

「取引だと？」

土方が目を細めた。

「そう。お前らが坂田　銀時の居場所に案内してくれたら俺が六鬼神について教えてやるよぉ。どうする？」

青年はニヤっとしながら言った。

「本当に教えてくれんだよな？」

土方が言った。

「あぁ。侍に二言はねぇー。」

青年はにっこりしながら言った。

「じゃぁ、ついてこい。」

青年が土方たちに案内されたのは万事屋銀ちゃん。

「ここだ。」

土方はそう言うと、強引にドアを開けた。
玄関にはたくさんの靴が並べてあった。

「来訪中か？」

土方が言った。
青年は奥から聞こえる声に耳をすませた。
そして、息を呑む。

（ヤベッ。）

土方たちは断りもなくあっさりと奥のドアを開けた。
そして、眼を見開く。

「おいおい。多串くん、チャイムも鳴らさないのかい？」

銀時が呆れながら言った。

「万事屋こいつぁどういうことだ？」

土方が言った。

「いやそれはな、っておわっ！」

銀時の言葉を何かが遮った。

銀時がかわしたものを高杉がキャッチした。

「こいつぁ。」

高杉の手に握られてたのは十手だった。
それを見て銀時も目を丸くしている。
そして、飛んできた方に目を向けた。

「龍銀・・・・。」

銀時が呟いた。

「やっぱ兄貴は兄貴だなぁ・・・。俺のことちゃんと覚えてくれてた。」

青年は笑顔で言った。

「覚えてるに決まってんだろ？この世でただ一人の血のつながった兄弟だからな。」

銀時が言った。

「ブラコンが・・・。」

高杉が後ろで呟いた。

「誰がブラコンなんだ？ちび助。」

銀時が挑発するように言った。

「なんだとこの天パやろーが。」

高杉が言った。

「つーか、兄貴の天パは相変わらずだねぇー。」

「お前は分かんねぇーだろーが。天パは大変なんだぞ。」

銀時が言った。

「分かんないよ。だって俺、ストレートだもんね。」

その様子を呆然と見る新八に神楽。

そして、真選組の人たち。

「おい。お前、一体誰なんだよ？」

土方が言った。

「あぁ、言ってなかったっけ？俺は坂田　龍銀（りゅうぎ）。銀時の血のつながった弟だよ。似てるだろ？」

龍銀が笑顔で言った。

沖田がよーく見る。

「ホントですぜィ。死んだ目や銀髪とか・・・。眼の色は違うんですねィ。」

土方が呆然として見ている。

「つーか、お前らなぁー。会議の邪魔してんじゃねぇーよ。」

銀時が言った。

「悪い・・・。で、六鬼神ってなんなんだ？」

土方が聞いた。

「もう前に居るじゃねぇーかよ。」

龍銀が言った。

「は？」

土方たちが間抜けな声を出す。

「だ・か・ら。前に居るじゃねぇーか。」

「どういう意味ですかィ？」

沖田が聞く。

「つまりよ『おい、言っていいのか？』あ？別にいいんじゃね？」

龍銀の声を桂が遮った。

「まぁーな。いつかはばれることだしな。」

高杉が言った。

「そういうの気にすんのはヅラだけだよ。」

春榎が言った。

「ヅラはヅラってことだな。」

銀時が呟いた。

「お前ら俺に恨みでもあんのか？」

桂が聞く。

「ある！！」

全員がそろって言った。

「俺って何？」

「とにかく、俺はそこの幕府の狗と取引やったの」

龍銀が言った。

「お前が言いたきゃ言えばいい。」

銀時が言った。

その後、龍銀の方を見て、ニヤッと笑った。

「じゃ、言っちゃう。六鬼神つーのはここに居る俺、兄貴、春榎、晋助、辰馬にヅラ。この６人が六鬼神なんだよ。」

龍銀が言った。

「えっ？銀さん本当ですか？」

「銀ちゃん、昔の有名人アルカ？」
「旦那。マジですかィ。」
3人が一斉に聞いた。
「お前ら、俺は聖徳太子じゃねぇーんだけど・・・。」
銀時がダルそうに言った。
「全部ホントのことだよ。ならば証拠でも見せるか？」
龍銀は呟き、銀時たちの方を見てニヤッと笑った。
銀時たちは全員うなずいた。
そして、懐から一つの鉢巻を取り出した。
「ククク。お前でも持ってたのかよ。銀時ィ。」
「当たり前だ。御守りみたいなものだかんな。」
銀時と高杉が笑いあう。
「これ、六鬼神の証。」
龍銀はそう言い、自分のを見せた。
鉢巻には字が書いてあった。
『俺らは六人でひとつ』っと・・・。
「てか、辰馬も懐に入れてたんだ。」
露呑が言った。

「アハハハハハ。以外がか？ま、金時の言うように御守りみたいなものじゃからの。」

辰馬が言った。

「おい、辰馬。何回言ったらお前は理解すんだ？俺は銀時だって言ってんだろーが。」

銀時が怒り混じりに言った。

「アハハハハハハ。今度からは気をつけるき。」

辰馬が笑い顔で言った。

「で、お前ら真選組はどうすんの？ここに攘夷志士が3人は居るしよ。ま、捕まえてもいいんだぜ？」

銀時が挑発するように言った。

「それは・・・。」

土方が口ごもる。

「幕府の狗のくせによ・・・。」

龍銀が呟いた。

「オメーが一番、攘夷志士ぽいですぜィ。」

沖田が言った。
「えっ？高杉の方が攘夷志士のオーラ出しまくってるけどな。」
龍銀がなんで？という顔で言った。
「俺のどこがオーラ出してんだ？」
高杉が言った。
「その顔からそう思うけど・・・・。」
龍銀が言った。
「お前な・・・。昔から全然変わってねぇーな。」
高杉が言った。
「それが、俺のとりえだかんな。」
龍銀がニヤッと笑いながら言った。
そんな中、土方が口を開いた。
「少し考えさせろ。」
「悪いが・・・俺らにも時間がねぇーんだ。」
銀時が言った。
真選組が驚いた顔をしている。
「ここまで六鬼神の話が広まってると・・・俺らの周りがあぶねぇ・

・・・。」

銀時が顔を下に向けながら言った。

「銀さん・・・・。」

「銀ちゃん・・・・。」

新八と神楽が心配そうな顔をしている。

「お前らが心配することなんてねぇーよ。」

銀時が二人の頭に手を置いた。

「ま、ともかく。今日はここらでお開きにしねぇーか？」

銀時が言った。

「じゃ、俺はここに居候させてもらうな。いいだろ？兄貴。」

龍銀が言った。

「別にいいよ。勝手にしろ。」

銀時が言った。

「じゃぁ、真選組さっさと帰れ。ヅラに高杉たちもだぞー。」

銀時が居た人たちを帰らせる。

「じゃーな、銀時。」

桂たちがそう言い、帰って行った。

「な、兄貴。もう俺らを置いてくなよ。」

龍銀が銀時に向けて呟いた。

「あぁ。分かってるよ・・・。」

兄貴・・・。

俺は、兄貴が大好きだ。

俺は、俺の大事な人をどんな手を使ってでも護る。

それが、俺の武士道だ。

第九訓　会議（後書き）

どうでしたか？

個人的に龍銀は高杉と銀時の間くらいの性格にしたいと思います。

感想お願いします。

第十訓　怪我（前書き）

高杉が壊れてる・・・・きがする・・・。

第十訓　怪我

「ククク。あのヤローは何も変わってなんかいねぇーな。」

万事屋からの帰り道、高杉と露呑が並んで歩いていた。

「クスクス。男なんか変わんないのが一番いいんだよ。」

露呑が笑いながら言った。

「アイツの武士道も変わってねぇーのかな。人を殺してでも大事なものを護るというその歪んだ愛情による武士道がよ。」

高杉が呟いた。

「変わってないと思うよ。昔から頑固だもん、あいつは・・・。」

露呑が言った。

「そういや、ヅラと銀時。晋助に向かってぶった斬る宣言してたんだ・・・。」

露呑が呟いた。

「あぁ。紅桜の時にな・・・。」

高杉が言った。

「紅桜かぁ～。あん時は私は別行動だったから良く分かんないけど

さぁ・・・。晋助さ
怪我したよね・・・。」
露呑が呆れたように言った。
「お前にとことん怒られたこととしか覚えてねぇーよ。」

紅桜の事件の直後。
『晋助！お前バカだろ。バカの中のバカだろ。』
露呑の声が響いた。
『いや・・・、それは・・・。』
高杉が口ごもる。
『言い訳は聞かないよ。全治1週間。もし、教本がなかったら死んでたかも知れないんだよ。』
露呑が怒った口調で言った。
『だから、それはな・・・。』
『言い訳は聞かねぇ言ってんだろ！！』
露呑が壁を殴る。
『なんで、俺が怒られるんだ・・・。』

高杉が呟いた。

『なんか言った？』

露呑が言った。

高杉が顔をこわばらせる。

『イヤ何も言ってねぇ・・・。』

高杉が言った。

『大体、また子も武市も大怪我なんだよ。誰のせい？』

露呑が言った。

『俺のせいじゃねぇ。それは、岡田の・・・。』

高杉が言った。

『ま、それはいいよ。だけど、晋助。銀時に何やった？』

露呑の眼には怒りがしっかりと含まれていた。

『俺は銀時はやってないからな・・・。そこんとこ勘違いすんじゃねぇーよ。』

『分かってるけどよ。ま、いっか。』

露呑が言った。

『諦めんの早いな・・・。』

高杉が呟いた。

『でもね・・・。次、銀時に何かやったら・・・私が許さないよ。』

露呑の眼は真剣だった。

「そんなことあったな・・・。」

高杉が呟いた。

紅桜。

その一件から晋助と銀時たちの溝が深まってしまった・・・。

でも、それでも・・・。

元に戻れる日が来る・・・。

私はそう信じるよ・・・・・・。

第十訓　怪我（後書き）

どうでしたか？

感想お願いします

第十一訓　温泉（上）（前書き）

温泉の話です。

神威と神楽は微妙に仲がいい設定です

第十一訓　温泉（上）

「銀さん・・・。帰りましょう・・・・・・。」

新八が言った。
新八と銀時、神楽、九ちゃん、お妙、龍銀は温泉に来ていた。
男の脱衣所に入った瞬間、新八たちは後悔した。
脱衣所に居たのは・・・・。

「貴様らまで来ていたのか。」
「久しぶりに温泉来たつーのに見知った人だらけじゃねぇーか・・・・。」
「お兄さんも温泉くるんだ。」
「銀時殿は誰の肌身を見に来たんですか？」
「俺らは違うからね。慰安温泉だからな。」
「指名手配犯にあってるがな・・・。」
「土方さん。俺らも少しの間休戦にしようとかいったじゃねぇですかィ。」
「アハハハハハ。金時も龍金も温泉がか？」

桂、高杉、神威、東城、近藤、土方、沖田、山崎、辰馬だった。

「金時じゃない、銀時だつってんじゃねぇーか。」
「龍金って誰のことだ！！」

銀時と龍銀が同時に言った。

「てか、皆さんそろって何やってんですか？」

新八が聞く。

「俺はお湯につかろうと思ってな、新八君。」

「俺は神威がきてよ温泉いきてぇー言うから・・・・。」

「私は若の付き添いです。」

「わしは陸奥を引き連れてのー。」

桂、高杉、東城、辰馬が言った。

女子風呂では・・・・。

「あ、むっちに露呑!!」

神楽が言った。

「神楽。」

「銀時のとこの・・・・。」

陸奥と露呑が言った。

「あら?神楽ちゃん知り合い?」

お妙が聞く。

「そうネ。むっちがもっさんとこの副官アル。で、露呑が銀ちゃんの彼女ネ。」

神楽が言った。

「彼女なんて大げさよ。」
露呑が頬を赤くしながら言った。

そして、男子風呂では・・・。
「貴様、その傷どうした？」
桂が銀時に言った。
「あぁ。これか？これは・・・あっ似蔵と殺り合った時のな・・・。」
銀時はそう言い高杉の方を見た。
「俺のせいじゃねえーから！」
高杉が言った。
「アハハハハ。ヅラもどうした？」
辰馬が桂の傷を指さしながら言った。
「これは・・・岡田にな・・・。」
桂も高杉の方を見た。

「俺のせいじゃねぇーからな・・・・・。」

高杉が言った。

「晋助。その腹の傷どうしたの？」

龍銀が聞いた。

「これはヅラがな。」

高杉が桂を睨みながら言った。

「・・・・悪かった・・・・。」

桂が静かに言った。

「大体このせいで春榎にメッチャ怒られたんだけど・・・・。」

高杉が呟いた。

「ドンマイだ・・・・。」

龍銀が言った。

でも、そんななか真選組の人たちの眼を集めたのは高杉の左目だった。

いつもは包帯で隠している左目は深そうな傷があった。

「貴様、左目を出した方がカリスマ性があるぞ。」

桂が言った。

「俺もそう思うがな・・・春榎を傷つけたくねぇーからよ・・・・。」
高杉が言った。
かなしそうに・・・。
「神威だっけ。お前、肌白いな・・・・。」
沖田が神威の肌を見て言った。
「夜兎の特徴だからね。」
笑顔で言った。

女子風呂では・・・・。
「むっちって髪の毛サラサラアルナ。露呑もネ。」
神楽が楽しそうに言った。
「神楽ちゃんだっけ？」
「そうアル。」
神楽が元気に答えた。
「神楽ちゃんもいい髪してるよ。」
露呑が神楽の髪を見ながら言った。

「今日ね、神楽ちゃんに似ている子も一緒に来ているの。」
露呑が言った。
「名前なんて言うアルカ？」
神楽が聞いた。
「神威だっけ？」
露呑が言った。
神楽が下を向いた。
「そいつ・・・私の兄貴ネ。」
「へぇー。似てるのも当たり前ね。龍銀と銀時みたいね。」
露呑が笑いながら言った。
「私たちそんなに仲良くないアルヨ。」
神楽が言った。
「そうなの？神威は気にしてるみたいだけど・・・。」
「えっ？」
露呑の声に神楽が声を上げた。
「兄妹ってそういうものなんだよ。」

露呑が笑って言った。

「わしら露天風呂に行ってくるき。」

陸奥が言った。

「私たちも行く。」

露呑と神楽もついて行った。

「やっぱ露天風呂つったらのぞきだよな・・・。」

近藤が言った。

「私は違います。若を護るためです。」

東城が言った。

「俺は違うよ。春榎の肌身何か見たくねぇーからな。」

そう言う銀時の頬が赤かった。

「わしは女なら誰でもいいき。」

辰馬が言った。

「兄貴たちバカだよな。春榎に殴られるちゃうつーの。」

龍銀が呆れるように言った。
「俺が先に見るんだ。」
近藤が言った。
「若の裸を見ることは私が許しません。私ならいいですが・・・・。」
東城が言った。
「何私情を持ちこんでんだ?」
「そうぜよ。」
辰馬と銀時が同時に言った。
そうなって争っているところに桶が飛んできた。
「ぐはっ。」
桶は近藤に直撃。
「げっ・・・・。」
他の3人が声を上げた。
「東城、貴様何をやっているんだ。」
九ちゃんが声を上げた。
「銀時のバカァ!!」

露呑の声が響いた。

「頭。おまんなにしちゅうがか？」

陸奥が怒っている口調で言った。

「近藤さん、いい加減にしてください。」

お妙が言った。

「出たら覚えておけよ！！」

女全員が言った。

銀時たちは顔を曇らせた。

第十一訓　温泉（上）（後書き）

どうでしたか？

感想お願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9807z/

鬼の女～血の娘～

2012年1月6日17時48分発行